

以下はイスラエル在住のガリコさんの友人のイスラエル人権弁護士のイタイ・マックさんが書いた小論で、日本の人に読んで欲しいという本人の希望もあるというので、訳した。訳者としては、こういう人道的立場でイスラエルの存在が正当化されるとは思わないが、解決への対話の糸口になるだろう。ひっきょうパレスチナ問題は基本的にイスラエル問題で、イスラエルの民主化革命なくしてはパレスチナ問題の解決はない。—訳者

ガザ封鎖を解除せよ

イタイ・マック著、脇浜義明訳

1970年1月14日クネセト（イスラエル議会）本会議で、当時の外相アバ・エバンはアフリカのビアフラの戦争について、「戦争より恐ろしいのは封鎖がもたらす惨事である—封鎖の被害者は民間人、とりわけ子どもである。子どもたちはこの世に生まれて苦痛だけの束の間の悲劇的な人生を送るだけだ。ビアフラの人々には聖書のエレミヤ4：9の哀歌の『剣で殺された者は飢えて死ぬ者より幸せである』が実行されている」と述べ、さらに「膨れ上がった腹、痩せこけた手足、訴えるような目をしたビアフラの子どもは、現世代の恥のシンボルである」と言った。これと同じことがガザにおけるイスラエルの行動に当て嵌まり、世界の日から現世代の恥と見られている。

1968年8月、駐ナイジェリア代理公使のエマヌエル・ロンは、ビアフラ反乱を弾圧するナイジェリア政府高官が、「飢餓戦略は戦争に正当な武器だ。先進諸国はそれを合法的手段として使ったではないか。何故ナイジェリアが飢餓を武器として使うことを非難されなければならないのか、と国際批判に対して自国を擁護した」と言ったと報告した。ナイジェリア高官と同じように、今、ネタニヤフ政府とその支援者は、ガザ封鎖に対する国際社会の非難を不当だと主張している。西側民主主義国も含めた国際的批判を真摯に受け止めないで、3月2日、ネタニヤフ政府はガザへの人道支援を全面的に禁止した。その後、部分的な援助計画を承認したが、それは「大海の一滴」程度の少量で、しかも援助を受けにやってきた飢えた人々を殺害する「死の罠」に使った。

イスラエルにとんでもない「国技」が発生した。ガザから発信される虐殺や餓死の写真をフェイクに仕立て上げる国技で、主に官僚、ジャーナリスト、インフルエンサーなどが行っている。ガザの悲劇の原因を探究するのではなく、悲劇を嘘だと「証明」する技術である。それは調査によって「証明」するのではなく、実に単純な作業である。すでにガザの子どもや乳児たちの悲惨な映像は国際メディアやガザの家族や医師たちによって映像として流されている。それを単に「嘘」だと言うだけのことである。子ども、女性、高齢者の死者が多いのに驚愕する人々が多いのは理解し難い—最初の被害者は、前から健康問題を抱え、免疫機構が弱いリスクグループになるのは当然であるからだ。特別な食事や医療が必要なのに、それが封鎖で届かないので、他の人より早く疫病にかかる。

ネタニヤフ政府の無茶な政策が作り出した現実ホホワイトハウスの分厚い壁を破った。J.D.ヴァンス副大統領は、「こんな映像を見たことがない。本当に悲痛だ。幼い子どもが飢えて死にしているのだ・・・イスラエルは援助物資を入れるべきだ」と言った。トランプ大統領も「たくさんの人を救うことができる。とりわけ子どもたちを。本当に飢餓があるのだ。フェイクではない・飢えた人に食料を届けるべきだ」と言った。

これに対し、ネタニヤフ政府は飢餓なんかは存在しない。もしあるとすれば、それはハマスと国連の責任だ。それにも関わらず、イスラエルは人道支援物資の空中投下と追加的陸上からの搬入を認めた、と言った。これは、国際社会の注意が他のことに移るまで、批判をかわすために、一時的な戦略的ゼスチュアにすぎない。21か月にわたる猛攻撃で飢えたガザの人々の健康被害は累積しており、小手先の短期的措置ではとても癒しにはならない。

世論調査ではほとんどのイスラエル人が戦争終結と合意による人質返還を望んでいる。しかし、それだけでは不十分である。戦争終結を主張するイスラエル人は同時に戦争遂行の実態に関しても声をあげ、人道物資や商品の自由なガザ搬入への妨害の廃止を要求しなければならない。イスラエル人は、人道に反する残酷な行動をしたネタニヤフ政府を黙認し、そんな政府を自分たちの代表だと認めるべきではない。

1968年7月22日、クネセトはビアフラ戦争に関する決議を通過させ、戦闘関係者に「困窮者に陸路、海路、空路による必要物資の十分な量の流入を許可せよ」と呼びかけた。戦争が終わるまで、女性と子どもの命を維持し、飢えているイボ

族やその他の部族への食糧を確保する援助物資の流入を妨害してはならない」と呼びかけた。同じことをネタニヤフ政府にやればよい。